

お父さんはぼくの応えん団長

鈴木 康介

ぼくは今年、一りん車に乗れるようになった。一りん車をスイスイ乗り回すお姉ちゃんがうらやましかつたけれど、むずかしそうでなかなかやってみるゆう気が出なかった。でも、休校になり、ステイホームでゴルフデンウィークもどこにも行けないだろうと思ったぼくは、こわい気持ちもあつたけれど、やってみることにした。

「一りん車練習したい。」

とお父さんにぼくが言ったのは、四月のおわりごろだった。

そこからぼくとお父さんの一りん車とつくくんがはじまつた。そのころテレワークだったお父さんと、近くの公園に夕方毎日行つた。さいしょはお父さんの手をプルプルふるえるくらい強くつかみながらゆっくりゆっくりペダルをこいでもすぐころぶ。たおれた一りん車が足にぶつかつて、いたくてお父さんのせいにした。ぼくの足はあざとすりきずだらけになり、ぜんぜんうまくいかなかった。もうやめたいと思つたこともある。でも、毎日お父さんと練習したことをむだにしたくないからがんばつた。お父さんの足にも一りん車がぶつかつてあざができていた。

二週間がたつたころ、コツをつかんだ。手をつないでいればスイスイのれる。そしてついに、お父さんの手ははなれてもれた。さいしょは五メートル、そして十メートル。お姉ちゃんとならんで百メートルのれた時は本当にうれしかった。お母さんもびびくりしていた。毎日かならずぼくにつきあつてく

れたお父さんがいたからできるようになったんだ。

考えてみると、お父さんはぼくがやりたいと言ふことにあまり反対しない。ほとんどさんせいしてくれる。

たとえば、プラモデルやペーパークラフトを作りたいと言つた時、一しょになつて一生けん命やってくれた。ぼくもお姉ちゃんがやっているバイオリンを習いたいと言つた時もお父さんは大さんせいしてくれたし、ぼくが車や電車が好きで行きたいというイベントにはいつもつれて行つてくれる。お母さんは、

「あまいなあ。」

と文くを言う時もあるけれど、お父さんは、

「きょうみを持つたことは、何がしょうらいやくに立つか分からないから何でも色いろやってみたらいい。」

つて言う。

ぼくは、お父さんと一しょに色いろやってみることがとてもうれしくて楽しいんだ。さいきは、しごとで帰りがおそいから、話したいことをためておいて、休みの日にマシガンのように話すんだ。

お父さんは、ぼくの一歩の応えん団だ。いつも応えんしてくれて、ありがとう。これからぼくがどんな道を歩いていても、お父さんがいれば心強いよ。ずつとぼくの応えん団長でいてね。